

船室のドアの隙間が、安物のリコーダーの  
ような音をたてている。空も水面もオホーツ  
クブルーの清々しさの中で、北風の音、船の  
エンジンの唸り、油切れした蝶番のようなカ  
モメの声、どれもが古里の音だと美咲は思っ  
た。

島影が近づいてきた。船が緩やかに舵をと  
り、港のある島の東側に向かうと、小さな街  
が島にしがみついているように見えてきた。  
その佇まいの活気の無さに、言い知れぬ思い  
が込み上げ、美咲は、ふと、中学の国語の教  
科書にあった、魯迅ろしんの『故郷』の冒頭あたり  
を思い出した。あの作品に初めて触れたとき  
の、寂しさとも哀しさともつかぬ感覚は、今  
でもはっきり覚えている。「寂寥せきりょう」という言葉  
を知ったのも、あの授業のときだった。けれ  
ど、あの主人公の帰郷と自分の帰郷は違う。

美咲は熟慮しての、望んだ帰郷なのだ。にもかかわらず、いや、だからこそ、島へ帰る覚悟と新しい暮らしへの想いが緋い交ぜとなり、感傷的になってしまふのかもしれない。

\*

港にはタクシーが二台だけ停まっていた。美咲はその一台に乗り込み、母の待つ高台の家へと向かった。

美咲が島に戻ると決めたのは、去年の秋のことだ。あと五年勤め上げれば定年の歳になる。それなりに手当も増える。それが、五年も前倒しで勤めを辞め、郷里の島に戻って来たのは、母の喜代が、昨年転んで骨折したことが背中を押したからだ。

喜代は年が明けると、まもなく八十歳になる。矍鑠かくしやくとしていて、これといった持病もない。大抵の場合、この歳で骨折をすると、そのまま寝たきりになるのが多い中、喜代は、みごとに復活し、今はもう骨折前の不自由のない身体に戻っている。とはいえ、喜代はや

はり、じき八十歳なのだ。

美咲は、北海道の北見市にある看護学校を卒業し、最初の数年は北見で、その後は札幌で看護師として勤めてきた。そんな経緯があったのも、当時付き合っていた男ひとの勤務先が札幌に移動したからで、その頃二人は結婚を意識した関係だった。だが、長すぎた春は、夏になり、秋になり、とうとう冬になって凍結したのだ。その後も札幌で勤め続け、気がつけば、とうとう退職まであと五年という歳になっていた。その間、男の影が無かったわけではないが、迂闊な結婚はしないと決めていた。勢いや焦りで結婚するなど、つまらないことだと、母や伯母たちを見てきて、そう思っていた。本当に価値観の合う人と出会わなければ、結婚などしなくていいという思いの下で、結局この歳まで一人で生きてきた。そして、そのことを後悔したことはない。それは、誰が示したわけでもない自分の道だったと思っっている。四十歳に差し掛かった頃、

いつかは島に帰ろうかという選択も頭をよぎったが、若さがそれを押しとどめていた。後悔しているのは、さっきタクシーを、この坂の下で降りてしまったことだ。それというのも、この道の両側にある桂の木が、キラメルのような、甘い匂いを放つ頃だと思っただからだ。その匂いは、何処で嗅いでも美咲は故郷の島を、この坂道を思い出すからで、真っ先に、この道を歩いてみたかったのだ。「まただ！」

美咲はスーツケースを引っ張りながら舌打ちした。キャスターが、ぬかるんだ道にめり込んだのは、これで三度目だった。タクシーの運転手の話では、昨日まで雨が続けていたらしい。

秋の長雨という言葉は、この北の島には無縁だ。この島の秋は、乾いた空気と澄んだ空、そして、磯の香と桂の木の匂いだ。美咲は思っている。しかし母の待つ家までの細い坂道は、いつになくぬかるみ、これも近年の地球

温暖化による、異常気象のせいだろうかと思  
いながら、溜息と入れ替えに甘い匂いを胸深  
く吸い込んだ。

\*

美咲が帰る数日前の夕方、喜代のもとにヤ  
スがやって来た。

ヤスは、むかしこの島でテーラーを営んで  
いた男の息子で、藤井康之という。一時は嫁  
と共に父親の後を継いだものの、時代の流れ  
には勝てず、もう随分前に廃業している。今  
は叔父の板金屋を手伝い、しかし、その仕事  
も十分に忙しいとは言えず、ちよつとした浜  
の仕事や畑の手伝い、冬には雪かき車の運転  
もこなす。

喜代の夫の一男は、しわい人で、他人に対  
して金を使うことを良しとしない人であった。  
生活費こそ喜代に渡していたが、その他の金  
やボーナスは、自分で管理する人であった。  
しかし外面そとづらだけは良くて、ええかっこしいで  
あったから、自分の洋服を注文したり、自分

の趣味に関わる出費には、財布の紐を緩ませた。それだからテラー藤井にとって、この家はお得意さんの部類だった。反対に喜代は、自分に対しては節約家であったが、他人のためには財布の紐を緩める人だった。

一男が定年退職をして、ほどなく鬼籍に入ると、喜代は水を得た魚のように格段と行動的になった。そのことは隠しようもなく表に現れ、しばらくは、会う人、会う人に、冷やかされるほどだった。喜代が老後を、慎ましくも何不自由のない暮らしができるのは、一男の、しわい性格と早死にしたお陰と言えなくもない。

喜代は、一男が貯めに貯めて残していったもののお陰で、習い事をしたり、ボランテイア活動に精を出した。やがて、テラー藤井の経営が怪しくなってきた頃から、喜代の注文が多くなった。ソファカバーや枕カバーの果てまで注文し、あるときヤスに言われた。

——おばさん、こんなの買ってきたほうが

安いって。

すると喜代は神妙な顔をして言った。

——ヤスは子供の頃だから知らないだろうけど、むかしから、何もかも藤井の大将にやってもらってたの。藤井のものは縫製が良いから長持ちするのよ。だけどいいよ寿命が来たってわけ。服を縫うヤスには、つまらないかもしれないけど、長年のよしみってことでお願いします。

喜代はそう言って頭を下げた。喜代は元来、嘘のつけない性質<sup>たち</sup>であったが、そういう類のことは平気で言っただけだ。

ヤスは持って来たビニール袋を差し出した。

「これさ、美咲が帰ったら食わしてやって」

「鮭かい？」

喜代は、袋を顔に近づけて中を伺った。

「あら！これメジカみたいだ」

「みたいもなんも、メジカだべ」

「あの子の大好物って知ってたの？」

「知らんけど、それならなお、良かったな。」

したけど、メジカ嫌いな人なんていないべさ」  
「そうだけど、これはあの子の何よりの好物  
でね。昔から地球滅亡の日の、最後の食事は、  
メジカと白いご飯って言うてるほどなの」  
「そう言われたら、持ってきた甲斐があった  
よ」

「だけど、これはほんまもんのメジカだよ。  
丸っこくて、いい色だ。昔は時々口に入った  
けど、昨今はほとんど見かけなくなったよ。ど  
こかへ高値で流れていくんだろうさ。当世は、  
島の人間でもなかなかねえ」  
メジカは白鮭の一種であるが、油の乗った  
別格の鮭である。美咲は、子供の頃から焼い  
ている匂いだけでメジカと言い当て大人たち  
を驚かせた。

世間話が終わり、ヤスは茶を飲み干して立  
ち上がると、腰にねじ込んだタオルを首に巻  
いた。玄関ドアを開けると、外は随分うす暗  
くなっていて、冷気が入ってきた。ヤスはジ  
ヤンバーの襟を立てて、ファスナーを首元ま

で引き上げた。

「日増しに、しばれてくるなあー」

「気つけて帰んなさいよ」

「お婆さん、今夜は月がレモン色だ」

喜代は、ヤスを見送るふりをして、月を見  
に外へ出て行った。

\*

喜代が、窓ガラスに額を付けて外を伺って  
いる。今朝から十回ばかりにもなる。美咲か  
らは、今日帰るとだけで、詳しい連絡もない。

二日前から喜代は、家の掃除や娘の好きな  
料理を作り続け、手の込んだ五品が出来上が  
っていた。美咲が帰ったら、あとは寿司の出  
前を取って、先日ヤスが持って来てくれたメ  
ジカを出してやるつもりだ。

その頃、美咲は家まであと百メートルばか  
りのところにいた。立ち止まると、眼下に広  
がる街の向こうの海を見た。さっきタクシー  
で通った市街地は、すっかり変わっていた。  
その変わりようが、美咲の若い頃とは違って

いる。陸おかの高校に入った頃は、島に戻るたびに新しい建物が増え、砂利道が舗装道路に変わるなどしていた。懐かしい風景も変わっていったが、それは島が発展していく、たのもしい姿でもあった。近年の変わり様は、それとは違う。島が老いたのだ。それは、何も昨日今日に始まったことではないのに、今しがたタクシーの車窓から見た景色のいろいろは、ジメジメと美咲の心に入り込んできた。美咲が通った小学校の木造校舎は、もう十五年以上も前に取り壊され、とつくに小さなコンクリートの箱のようになっていく。それも今日は、今更のように寂しく思えた。

美咲の知っているこの島は、流水が去り、渡り鳥が帰ると、あちこちに野生の花が咲き始める。夏の盛りには祭りがあり、神輿かみこと山車やまぐるまが島中を練り歩き、夜には盆踊りの音が賑やかに響いた。秋になると畑は収穫に忙しく、冬に向かう頃には女達が、漬物や飯い、寿司ずしづくりを始め、家々の軒下には、越冬用の野菜や

魚などが吊るされ彩りを添えた。港は季節を問わず、威勢の良い漁師たちで沸いていた。

今、眼下に広がる街に、往時の面影はない。軒下も寂しげになった。繁華街も、齒の抜けたように駐車場ばかりが増え、もう無い店の看板が、錆びたまま放置されている。横断歩道の線も薄くなったままだ。それでも遠く広がる入江の形と、その向こうの小高い丘の稜線は、昔と変わらず、今は冬に向かう色合いを呈していた。

美咲は、それらを確認すると、また歩き出した。年が明け、暖かい季節になったら、母と二人で少し贅沢な旅行に行く決めていく。行く先は冬の間にくっきり相談する予定だ。

美咲の肺が、桂の木の匂いで一杯になった頃、喜代の待つ家が現れた。ドアノブに手をかけようとしたその前に、ドアが開き、喜代の顔が現れた。喜代は割烹着姿で、サンダルを踏んだまま三和土に立っていた。

「あれ、美咲じゃないの」

不意の客でも迎えるような素振りだ。

「ただいま。待ってたあ？」

「もっと遅くなると思っていたら、随分早かったじゃない。予定狂っちゃうわ」

首を、鶴のように長くして待っていても、そんな言い方をする相変わらずの母に、美咲も負けてはいなかった。

「倒れて、頭でも打っていないかと思ってき。

実は昨日、網走で一泊して、早いほうの船に乗ったの」

美咲の実家は、父の一男が亡くなる十年前に建て替えた家だ。その当時、娘はもう、この島には戻らないだろうと踏んで、最低限の間取りで建てたものだった。玄関を上がると右手に十畳間の寝室、左にはトイレと風呂場、突き当りが居間になっている。居間の北側には台所、南には大きな窓があり、南東に六畳間の予備の部屋があるきりだ。最低限の作りに抑えたぶん居間は広い。ダイニングセットとソファアの他に、窓辺にもちよっとしたス

ペースがとられ、ホテルの窓際のように小さなテーブルと籐の椅子が二脚設しつちえてある。海が眺められるし、高台にあるため夜も覗かれる心配なくカーテンを開け放して夜景が見られる。この風情のある窓辺が、喜代も美咲も好きな場所だった。

\*

美咲は疲れた様子で、ソファに足を投げ出したまま、蒸かした南瓜を食べている。

「ヘエー、ヤスさんがメジカをねえー。そういうところが島ならではの暖かさだよ」

「ヤスばかりじゃないよ。今美咲が食べている南瓜も、和田の恵子ちゃんが持ってきてくれたんだよ。自分で育てたんだって。弘子さんも引越すには、いくらあってもいいでしょ。よって、雑巾をたくさん縫ってきてくれたよ」

「さすがに同い年でも、主婦は目のつけどころが違うわ」

「和ちゃん夫妻も荷物が届いたら手伝うから声を掛けてって。宇野の爺ちゃんも、一緒に

飲むのが楽しみだつてよ」

二人で四方山話をしてしていると、あつと言う間に陽が暮れてきた。寿司の出前を取ろうとする喜代の手を、受話器の上から押さえて美咲は言った。

「お寿司はいいよ。こんなにたくさんのお袋の味と、メジカもあるんだから」

「だけどさ、今日は食い意地の張った娘が島に戻った日だからね」

喜代は腹の横をパンパン叩いてみせた。

「その代わり、熱爛あつかんを少し頂きたい」

そう言うと美咲はペロリと舌を出した。

「ちゃんと買ってありますよ。しかし、呑ん

べいは誰に似たのかね」

「お母様でしょうよ」

「そうだね。あなたの父さんは、勿体ないつて、貰い物以外は飲まなかった。つままない男だったねえ」

\*

翌朝、美咲が起き出して居間に行くと、す

でに朝食の準備をすませた喜代が、飯を盛つた仏飯器ぶつばんきを手に仏壇の前にいた。それを中腰のまま、一男の遺影の前に置いて、リンを鳴らし素早く手を合わせると仏壇から離れた。台所から、味噌汁の仕上げをして美咲の前に運ぶその所作は、仏飯器の扱いより丁寧だ。「今日から暫くの間、私が居住するスペースの確保をさせてもらうね」

みそ汁で眼鏡を曇らせながら美咲が言った。

「これからは、美咲がこの家の主あるじなんだから、好きにきなさい」

いつになく喜代は素直だ。

「次の土曜日に、引っ越しの荷物が届く予定だから、それまでに家の中を整理したいの。家電は友達に譲ってきたんだけどね、ベッドと机と椅子と……あと、本が本棚に入りきらないくらい多いの。少し居間の方に置いてもいいかしら」

「どうせ口出ししたって、あんたの好きにするんでしようよ」

昔は仕切り屋だった喜代も、今は内心、娘の帰郷を手放しで喜んでいて、何もかも好きにさせてよいという風だ。

「六畳間の方なら、戸を開けておけば、すぐに暖まるから、母さんはそっちの方がいいと思う。ベッドを置けるように片付けるからさ」

「はいはい、婆さんはどこでもいいよ」

「それから、この際だから我が家も断捨離をしようよ。いらぬものもあるでしょう」

「まあね。じきに天国に旅立つんだし、お任せします」

「こんなに元気で、減らず口の多い婆さんは、そう簡単に天国の入国許可はおりないはずよ」

流しで食器を洗い始めると、喜代がやって来て横から腰で美咲を押した。

「これくらい、美咲に世話かけやしないよ」

「そうね。ボケ防止のためにも甘やかさないことにする」

喜代は、美咲から泡立ったスポンジを受け取ると、慣れた手つきで皿を洗い始めた。

「今日は、九時からボランティア活動。そのあとメンバーでお昼を食べて、午後は絵手紙の会が二時間くらい。夕飯の買い物は帰りにして来るから、鬼のいぬ間の洗濯をどうぞ。あっ、足はアツシー君がいるから大丈夫」

喜代が出かけてしまうと、美咲は喜代の部屋にする六畳間に向かった。押し入れの中を整理したら、上段にポールを渡し、襖をアコ―デオンカーテンに替えてクローゼットにするつもりだ。

押し入れのものを出し始めると、美咲は、たちまち懐かしさに包まれ手を止めた。さすがに子供の時にあった柳<sup>やなぎ</sup>行李は、もうなかったが、玉の肌シャンプーだのハウスカレードの大きな缶や、ミツワ石鹼の箱など、美咲が幼い頃に見たものが、まだ残っていた。中は身は古い布切れや、紐やボタンなど、つまらないものばかりだったが、小さな丸い缶もない。って、意味不明の言葉が印刷されている。

――グンジンレク・ムーリク？

しばらく考えていたが、右から左に読んでみると理解できた。

「クレンジング・クリームかあ」

美咲があの木箱を見つけたのは、押し入れの一番奥のほうだった。それは、物心ついたときには既にあつたものだ。思えばあの日まで、その木箱は何の変哲もない木箱にすぎなかつた。

あれは、美咲が中学一年の初秋のことだった。毎年春と秋に、喜代は衣替えと虫干しも兼ねて、タンスの中の入替えと、押し入れの掃除をするのが習わしだった。あの日は、ちょうどその日で、部屋の前を通り過ぎようとして美咲は足を止めた。

行李は一人に一つずつあって、父の行李は黒い紐、母は白、美咲のには赤い紐が掛けられている。行李はそれら三つの他に、もう一つあり、その中には捨てられない古着や生地をしまい込んでいる。喜代は、それらの行李を開けて部屋中を散らかしていた。

――あら、私が小学校の入学式に穿いたスカートだ。まだあったんだね。

美咲はその場に座り込んだ。畳の上には他にも色々な箱や缶なども散らばっていて、そこに、その木箱はあった。美咲が何気なく木箱に手を伸ばしかけると、喜代が慌てた声を出した。

――あっ、それはだめ！

そして素早く木箱を奪い取ると、さっさと押し入れの奥に押し込んだ。一瞬、美咲は驚いたが、喜代はすぐさま傍らにあった帽子を指して言った。

――これ、懐かしいでしょ？ 小学校の鼓笛隊で、美咲がかぶっていたベレー。

喜代は青いベレー帽を手に取り、人差し指を入れてクルクル回して見せた。美咲はそれに気を取られ、二人で鼓笛隊の思い出話に夢中になり、箱のことはうやむやになってしまった。しかし箱は、その時から気になる秘密の箱となった。その後も何度か、思い出して

は覗いて見たい想いに駆られたが、そんな勇氣もなく、やがて忘れてしまった。時隔て、美咲はまた、あの木箱と対面したことで、忘れていた興味が湧いてきた。あのときの喜代の慌てようは何だったのか。人に見られたくないものとは何か。さしずめ、女学校時代のラブレターか交換日記の類だろう。――もう時効よね――そう自分に言い聞かせて美咲は箱のふたを開いた。中に入っていたのは、小さな桐の箱に入った盃が一つ。他に三枚のハガキと、一葉の写真だけだった。盃を包んでいる和紙の文字を読むと、母の長兄にあたる伯父、勇の名と共に「武運長久」と墨書きしていることから、伯父が出征するときに使った盃だろう。「軍事郵便」と記された赤茶けたハガキも、勇が戦地から妹の喜代に宛てたものだった。すべて、かなで書かれていたことが、喜代も子供だったことを示している。不思議な気がした。喜代が年の離れた

長兄を慕っていたことは、美咲も知る話で、親戚が集まったときに、しばしば話に登場する勇伯父は、ハンサムで背も高く、成績優秀で、特待生だったと聞いている。そのことは、一族の自慢でもあったようだ。それから察するに、写真も伯父のものだろうと思ったが、そこには見たこともない男と喜代が、並んで写っていた。

戦死したという伯父の写真は、祖父母の写真と共に、ジャニーズ系の面立ちで鴨居のところから見下ろしている。子供の頃から見えてきたのだから、写真の人が伯父でないことは明らかだ。その人は、太い眉に濃い髭と大きな目が特徴的で、母方の血筋とも父方の血筋とも縁のない風貌だった。写真を見ながら、美咲は、あらん限りの想像をしてみたが、何も思い浮かばない。父と出会う前の恋人かとも考えたが、母の顔と衣服から、美咲が生まれた後の頃のように思われた。

喜代の留守中に、部屋の片づけをはかどら

せるつもりだった。しかし、その木箱を見つけたことで、ついついハガキを読んだり、写真について思いを馳せたりしているうちに、時間が過ぎていった。気がつけば、紺色に染まった窓の向こうの、低いところに月があった。

やがて、ヘッドライトの光が近づいて来て家の前で止まると、喜代のいつもよりトーンの高い、よそ行きの声が聞えた。ドアを閉める音、車がUターンする音、そして玄関からドタドタと足音がして、喜代が家に入るなり話し始めた。

「いやー遅くなってしまったて……それがさ、由美さんたら絵手紙の公募展に出して、賞を取ったって言うんだわ。それで来週、会の後にお祝いしようってことになってさ。その打ち合わせをしてたらこんな時間に……」

喜代は聞かれもしないうちから一通り話すと、美咲の顔を見て、わけもなく微笑んだ。「美咲がいると、自分で明かりをつけなくて

便利だね」

相変わらず喜代は、そういう言い方で、嬉しさを隠そうとする。コートやバッグを廊下のハンガーラックにかけると、袋を二つ持つて慌ただしく台所に行く。スーパーの袋のガサガサした音と共に、流し台にゴロンゴロンという音が響いた。

「送ってくれた平田さんから、新ジャガ貰ったの。粉吹きイモにでもしようかね」

そういう喜代の声には、今までとは違う、芯のある弾みが感じられた。

夕食がすむと、美咲は盆に載せた二つの湯飲みをテーブルの上に置いた。さつきから、昼間見た写真のことばかり考えている。そのことが喉まで出かかったが、喜代にへそでも曲げられたら厄介だ。これはじっくりと、チャンスを探るのが得策だろう。明日は、中古の軽自動車を見に行くことにしている。今までの車は、二十万キロ以上も走ったので札幌で処分してきた。明日は喜代も連れて行こう。

帰りに梅本堂に寄り、挨拶がてらケーキを買って、夕食後に喜代の好きな紅茶でも飲みながら話を切り出そう。

\*

外は眩いほど光あふれた朝だった。窓を開けると、まだ雪こそないが、冬の到来が近いことを知らせるような寒さが、昨日とは違った。厳しさを家の周りを取り囲んでいた。

北のこの島は「常冬<sup>とこふゆ</sup>」の島であると言われている。子供の頃、大人たちがよくそんな話をしていたのを美咲は時々思い出す。

春が暖かいと思うのは、流水が去り、雪が解けるから、そんな気がするのだと人々は言う。実際、五月の半ばに桜は咲くが、ストーブは必要で、真夏でさえ多少はストーブの話になる。夏は足早に過ぎ、秋になると冬の支度を始める。そして、あんなに春や夏を待ちわびたはずなのに、冬になってしまおうと何故か、ほっとして落ち着くのだ。春は冬の後始末、夏は一瞬の行事、秋は冬の準備の季節

で、一年は冬を中心に回っている。この島の  
人たちは、本当は夏を待っているのではなく、  
冬を待っているのかもしれない。

車屋には、予想以上の車が並んでいた。喜  
代のこれからを考え、高齢者仕様の車も選択  
肢に入れ、美咲は母に車の乗り降りをさせ、  
どれが楽であるかを訊いたり、身体の動きを  
観察したりした。

「美咲が運転するんだから、母さんにこんな  
ことさせなくてもいいでしょう。あんたの使  
い易い車でいんだからさ」

喜代は、自分のためだと重々知りながらも  
相変わらずだ。

この時期、陽が沈むのが早くなるばかりか、  
突然のように陽が沈む。二人が家に着く頃  
は、もうあたりはすっかり暗くなっていた。

美咲は家の中に入るとすぐストーブを点け、  
風呂場に行つてバスタブの蛇口を捻った。暖  
かいお湯が湯煙となり、風呂場の中に広がり  
始めた。湯をはる間、居間の窓から外を覗く

と、帰り路では見えなかった月が、レモン色を放ちながら昇り始めていた。見下ろす夜景は、子供の頃よりも、随分小さくなっている。あの頃、店屋の看板は、電光型のものが多く、店が閉まっても夜通し点灯させていた店もあった。それだから、小さな島でも街の夜は煌めいていた。その上、港では烏賊釣り船が眩しいほどの光を放つてもいた。だから月は遠慮がちに、ひっそりと出ていた。それがいつからか、烏賊釣り船は姿を消し、看板は電光型でなくなり、店屋の数も減った。そのせいか、月は自信を取り戻したかのように輝いて見える。

\*

静けさの中で、湯が流れる音が心地良かった。美咲は長く息を吐くと目を瞑り、この島が栄えていた往時の姿を思い出していた。美咲が子供の頃に住んでいた家は、この高台の下にあった。街には大きな通りが三本あって、それぞれの顔を持っていた。海沿いの

海岸通りは、主に漁業関係の人々が住み、倉庫や加工場が多くあった。酒場や映画館など、遊び場が集まっている大黒通りは、別名、夜の街通りとも呼ばれていた。島一番の繁華街は大通りと言い、銀行や郵便局をはじめ、島の暮らしに必要な施設や様々な商店が軒を連ねていた。

美咲たちの家は、仲通りと呼ばれる場所にあった。近くには、板金屋、モーター屋、作り家具屋など、主に職人技を必要とする業種が集まり、それぞれの音が響き合っていた。金属を打つ音、モーターの音、鋸の音やドリルの音を、美咲は今でも思い出す。そして、住宅の間に、魚屋、肉屋、雑貨屋など、日常生活に必要な店がバランスよく点在していて、その周辺が、美咲の生きる世界の、ほぼ全てであった。たまに大通りに出かけるときには、たとえば、それが本屋や大衆食堂であっても、幼い美咲は緊張した。

\*

夕食を終えると、美咲が紅茶の準備をする  
あいだ、喜代は、まな板の上で自分が漬けた  
大根の粕漬けを薄切りにしている。

「ケーキの後の口直し……」

そう呟く喜代の嬉しそうな姿に、美咲は島  
に戻った自分の心を今一度確かめた。

窓際の小さなテーブルの上にはケーキと紅  
茶と粕漬けが置かれ、件の写真は、近くのC  
D デッキと壁の間にこっそり差し込んである。

「今夜は月が凜としているから、明け方は冷  
えるかもしれんね」

喜代はそんな他愛もない事を言いながら、  
満ち足りた様子だ。美咲は、あの箱のことを  
切り出すタイミングを探っていた。叱られた  
り、ヘソを曲げられたりするのには困るが、気  
になっしょうがない。思い切って短刀直入  
に訊いたほうが、かえっていいのかもしれな  
い。

「そうね、厚手の掛け蒲団、出しておく？」

「母さんならまだ大丈夫」

喜代は紅茶を啜ると、大好きなモンブランを口にして嬉しそうである。美咲もケーキを一切れ口に入れ、紅茶を啜ると、小さく深呼吸をした。

「昨日、押し入れて木箱見つけたんだけどね、中に入っている写真の人、あの人誰？　母さんと一緒に写っている髭の……」

喜代の目が一瞬大きく開かれた。けれどすぐに柔らかい笑みが浮かんだ。美咲はその表情を確かめると、CDデッキの横から写真を出してきて、テーブルの上に置いた。喜代は写真を手に取り、眼を細めながら、何か不思議なものでも見るように眺めている。美咲は喜代の椅子の後ろにまわると、肩越しに顔を寄せ一緒に覗き込んだ。

「ほら、この人」

「ウン」

喜代は、その写真が話題になったことに、まんざらでもない様子だ。

「ウフフ……」

勿体ぶった素振りが意外だった。

「誰なの？ 見かけない人だけど」

美咲は自分の椅子に戻り、また紅茶とケーキを口にした。

「母さんのいい人」

「えっ！ なに？ どういうこと？」

「ウ、ワ、キ、かなあー」

紅茶を含んだスポンジケーキが、美咲の気管の入り口を刺激して激しくむせた。

「あら、何もそんな：：」

喜代は、モンブランをまた口に運びながら涼しい顔をしている。美咲は咳が止まらず、顔を赤くしながら苦しそうだ。

「変な：：冗談：：は、やめてよ」

「冗談でもないけど」

そういうと喜代は窓の外に顔を向けた。

「浮気は嘘だわ。あれは本気だったの」

「：：もう！ 母さんたら」

美咲は目を潤ませながら、まだ自分の胸を叩いている。

喜代は窓の向こうを見ながら、フオークの先にケーキの一口を刺したまま動かない。

「本当？　じゃないよね」

母の顔を覗き込んで言葉を待った。

「あら、母さんだって……」

母さんだって？　母さんだって、何だって言うのだろう。美咲は自分の心臓の鼓動が、耳の奥からアンプ越しに聞こえてくるような気がした。

「あれは……あんたがまだ小さい頃よ」

美咲はイガイガしている喉の奥から、小さな声を絞り出すようにして訊いた。

「どのくらい？」

「一歳ちよつと」

喜代がカップをソーサーに置く音が、静かな部屋の中で、異様に大きく響いた気がした。

「我が家が仲通りにあった頃だった。見知らぬ男の人が近所に引っ越して来てね。小川さんの家の、空き家になっていたところに」

「ああ、父さんと雪かきのことで大喧嘩した

とかいう筋向いの小川さん？」

「そうそう。誰から聞いたの？ あんたの生まれる前のことなのに」

喜代は愉快そうにコロコロと笑った。

「そこに知らない人が住み始めたの。当時、小川さんは稚内わっかないに引っ越した後で、いろいろな経緯かもわからなくて、いろんな憶測が飛び交ってね。中には刑務所あがりじゃないかって言い出す人もいた。それで町内会は消極的になったみたい」

「その人、近所にご挨拶とかは無かったの」

「あったよ。手ぬぐいを持って挨拶に来た。

でも町内会長が、この島に来た理由を尋ねると『この海の色が好きで来ました』って言ったんだって。それで、そんなのおかしいってことになったみたい」

美咲はしばし天井を仰いだ。

「しばらくして分かったんだけど、彼は絵描きだったの。売れない絵描き。町内会長が言うには、海の色が好きというだけで、こんな

北の島に来るなんて、金持ちの道楽息子か、よつぽどの売れっ子画家だって。だけど彼はみすぼらしかったから、どっちにも見えなかった。それで何か悪いことでもして、故郷を捨ててこの島に来たんじゃないかって、そんな噂が広まったみたい」

「憶測でそんなこと言うなんて……」

「それでも、その年の夏祭りで、楽器を弾きながら歌を披露したそうよ。私は見てないけどね。馴染もうと頑張ったみたい。町内の人たちと話をする機会もあったようだけど、あの人、口下手だから……。噂を払拭できなかったんだらうね」

喜代が言った「あの人」という言い方に、美咲は、彼を男と意識した喜代を感じた。

「それで母さんとは、どんなことでどんなことに？」

そこまで言って、過ぎた質問をしたと思っただが、もう遅かった。しかし喜代はそんな言葉に動じる素振りもなく、遠い日を思い出し

ているようだった。

「最初は私のほうから」

「えっ！」

ずいぶん積極的な言葉に美咲は動揺した。一度足を組みなおしてから大きく息を吸い、乾いた口を紅茶で湿らせたが、紅茶の味はしななかった。

「斜め向かいの角だったから、どこに行くにも、そこを通るの。暖かい時期は、窓を開けて絵を描いているから、よく見えるの」

「油絵具の臭いを飛ばすためかしら」

「ある夜、ふいの来客があつて、急遽お茶菓子を買ひに出かけたら、晩ごはんを食べている姿が見えたの。カーテンもないから夜は特に見えるの。一人で黙々と食べているんだよ。それがねえ、なんとも寂しそうで。おかずは何かかな？　なんて考えているうちに、何か持って行ってあげたくなっちゃったの」

「父さんは知っていたの？」

「もちろんいないときにだよ。初めて訪ねた

ときに、少しお喋りしたの。あの人、南の島の人だった。オキナワ。それも離島の……」

「えっ、でもその頃ってたしか」

「そう、パスポートが必要な時代だった。だから余計に詮索されたんだと思うの。あの時代、沖縄に行った人なんて、この辺りには、いなかっただろうし」

「そうね。こんな辺鄙へんぴな北の島に、まして沖縄からっていうのもね。それで、どうして好きになったの」

「初めは、ただの同情心だったのかもしれない。絵の具だらけで、みんなに知らんふりされて、寂しそうで……。どこかで沖縄で戦死した兄さんのことも重なったのかな」

「ああ、勇伯父さん沖縄だった？」

「そう。遠い南の島に行って戦死するまで、どんな日々を送っていたのか、どんな景色を見たのか……。そんなこともあって、南の島の話を知りたい気持ちもあったのかもしれない。何度か手料理を持って行ったの」

喜代には三人の兄がいて、その一番上の兄には特に可愛がられたと聞かされていた。

「あの人が来た翌年の夏に、あんな熱を出してね」

喜代は、そこまで言うのと二の腕をさすった。

「ストーブの近くに移動する？」

「いや。母さん今夜は、窓辺がいい」

「じゃあ、羽織るものでも持ってこようか？」

「大丈夫。それより、ラム酒があるの。あれのお湯割りで温まろうかな」

今夜は窓際がいいという母、ラム酒が飲みたいという母、いよいよ話の核心に入ることの意味しているように思われた。喜代の語られることのなかった歴史を聞くのに、アルコールは美咲にとっても必要な気がした。立ち上がろうとすると、喜代は掌を立てて制した。

「いい。母さんがするから」

きっぱりそう言ったのは、喜代も、続きの話をする心の準備でも、したかったのだろうか。しばらくすると、台所からマグカップに

入れたラム酒のお湯割りを運んで来た。  
「ケーキには紅茶もいいけど、ラム酒ってのも、これまた合うんだよ」  
カップを置くと、籐の椅子の背に掛けてあったストールを、膝にのせて座った。  
「どこまで話したかね？」  
「私が熱を出したって……」  
「そうそう、あのとき父さんは出張、診療所の先生も学会とやらで留守にしていた。母さんとしては、陸おかの病院に連れて行こうと思っただけけど、あげく、定期船が故障で、夕方にならないと来ないときたもんだ。どうしようかと思ったよ」  
「お世話かけまして」  
美咲はペコリと頭をさげた。  
そこで喜代はラム酒を一口啜った。が、続けてもう一口啜った。それが二度続いた。喜代にしてみれば、話の核心に飛び立つ滑走路が短いのか、一呼吸置くと、もう一度ラム酒を口にした。喜代は過去をラム酒で飲み干そ

うとしているのか、それとも記憶を呼び覚まそうとでもしているのだろうか。静けさの中、脱衣場にある給湯ボイラーが小さく唸った。「それで、小さな舟の漁師さんに舟を出してもらいたいと思ったんだけど、天气が怪しくて、いい顔されなかった。当然だけどね。港で右往左往しているときに、あの人が現れて、あちこちをまわって、舟を出してくれるように交渉をしてくれたの。その上、陸の病院までついて行くって言ってくれて」

「あら、頼もしいじゃない」

「厚かましいようで辞退したけど、陸の本屋で買いたいものがあるので、ついでに乗せてもらいたいからって。母さんの荷物を奪うように取ってね……。そしたら帰りの舟の上で、やっぱり雨が降ってきちゃった。それも大雨」

「船室は？」

「そんなもん。ボートに毛が生えたような小さな舟だもの。そのときあの人どうしたと思う？ あんたの上で四つん這いになって、雨

に濡れるのを防いでくれたんだよ」

そこまで一気に話すと、喜代は口を一文字にきつく締め、窓の外に顔を向けた。膝の上にある皺の多い両手は、愛おしいものを抱くようにマグカップを包み込んでいる。

「私の命の恩人ってことかしらね」

なんだか空気がジメジメしてきた。そのうえボイラーの運転も停まり、静けさが重さを伴って部屋に充満している。美咲はこういう空気が苦手だ。何か明るい合いの手でも入れようと思うが、それも浮かばない。

「それだけじゃないの」

喜代の顔から、さっきまでの、しんみりとした表情は消えて、そこには若い女性のような瞳の煌めきがあった。

「あの人、後にも先にも、その時の事を全然恩着せがましく言わないの。私がお礼を言っても『ぬつどう宝さ』と言うだけ。『ぬつ』って命の意味なんだって。命は宝ものってことだね」

喜代は、若い女性のようにうつむいている。もうじき八十歳になる母の横顔に、美咲は、若い女性を見ている気がした。自分が、母と思っているこの人は、ついさっきまで母以外の何ものでもなかった。喜代は、美咲が知っている限り、ずっと母で、まして女という目で見たこともなければ、喜代が美咲に女を感じさせたこともない。しかし今は、母が女という生き物に変身したような戸惑いを覚えていた。何を話して良いのかさえ分からなかった。かといって、黙っていることもできなかつた。

「その一件で惚れたの？」

美咲は有り体な質問をしながら、頭はぼんやりとしていた。

「いつからかは分からない。気がついたらね。そもそも、惚れた、晴れたって、そんな軽々しいものじゃないよ。愛してしまっただよ」

「……！」

美咲はどうしていいか分からず、一人で宙

を泳ぐようにおどけてみた。しかし、その実、頭の中は真っ白になっていた。

美咲は未だかつて、実生活の中で「愛」という言葉を使ったことがない。くすぐったくて好きではないのだ。ドラマや映画の中でさえ、日本人には合わない気がしている。聞いているだけでも気恥ずかしい。それが現実の空間で、しかも八十を前にした母親の口から聞こうとは、ついぞ思ってもいなかった。

「あなたの熱が落ち着いてから、あの人のところにお礼をと思って、手料理とお酒二升を持って出かけようとしたとき、父さんなんて言ったと思う？ 『一升でたくさんだろう』だって。ああ、情けないねえー。それなりの給料を貰っている人が、自分の娘を助けてもらったというのに。そういう男ですよ、あれは」

喜代は、煙草の煙でも吐くように、口元二本の指をあて、長い息を吐いた。喜代の昔からの癖で、呆れたときや、むしゃくしゃす

るときにする仕草だ。美咲は子供の頃から、そんな母の姿を何度も見てきた。そして今は、母が父という存在がありながら、よその男ひとを好きになったという話を聞いて、この先を聞くのが怖い気すらした。自分から次の展開を訊く勇気がない。母はその男ひとの前で女になったのだろうか。たとえひと時でも女として「あの人」と過ごした時間があつたのだろうか。二人とも黙ったままだ。

気がつくくと喜代は、今までの乙女のような喜代から、母の顔に戻っていた。

「母さんが、あの人と、どこまでの関係だったのか、知りたいんでないかい？」  
「ずばり言われて美咲はドキリとした。知りたいのか知りたくないのか、それすら分らない。ただ、その事を考えていたのは事実だった。喜代は、そんな娘の様子を見透かし、悪戯っぽい顔で美咲の顔を覗き込むと、箱の中から、もう一つケーキを取り出した。そして、もう意に介さないかのようにそれを食べ

ながら、淡々と話し続けた。

「大丈夫。あんたの考えているようなことはありません。でも、母さんの人生の中で、本当に好きになった唯一無二の男ひとだよ、あの人は……」

母が父のことを、あまり良く思っていない空気を、美咲は中学生の頃から感じていた。しかし、それがどの程度なのかは分からなかったし喧嘩らしきものも見たことは無かった。ただ後になって思えば、それが逆に、しなやかさを失った空気を漂わせてもいた。

「母さんは父さんのこと、どう思っていたの」  
喜代は、フツと鼻から短く息を吐くと、書き損じの便せんでも丸めるように言った。

「んなこと！」  
俄かに美咲は、中学生の頃、母に質問したことを思い出した。

——母さん達は何結婚だったの。恋愛結婚？  
それともお見合い？

——勢い結婚！

笑いながら喜代はそう言った。美咲も、冗談だと思いつながら一緒に笑った。

その頃の時代背景から考えると、そうだと  
しても、無理からぬことであつたのかも知れ  
ない。あの時代、好き嫌いを越えて、生きる  
ために夫婦になつた人も少なくなかつたこと  
は、伯母たちの話からも知っている。それで  
も、歳月の中で育む愛もあるだろうし、人生  
の終わり際になつて、理解し合える夫婦もあ  
るだろう。けれど、好きでもない人と結婚を  
して、ただでさえ添えない価値観のなかで、  
好きな人が出来てからの喜代は、どのよう  
に自分の気持ちと折り合いをつけて生きてきた  
のだろうか。

「母さんは、その人のどこが好きだつたの？」

喜代は答えない。その代わりにこう言った。

「男ひとを好きになるということは、単純じゃな  
いねえ」

かつて、母がこれほど自分の内を見せ、思  
いを語つたことなどあつただらうか。美咲は

母の中に、母以外の「喜代」という人格を初めて感じていた。

「島の人間という共通点に、親しみを感じたのかもしれない。親切にされたことも、父さんにはない男気も。だけどわたしは、あの人の美しい心根に惹かれたんだと思う。あの人は、自分のする善行は他人にも自分にも知られないようにする人だったんだよ。本屋に行きたいと言ったのも、どうだったか」

喜代の話を聞き、美咲は厳格でありながら、優しい祖父の三郎を思い出した。

小学二年生のとき、クラスの子が学校を休み、新しく班長になった美咲が給食のパンを届けることになった。その子が休んだのは病気ではなく、家の手伝いだったかもしれないかった。そんなことが、しばしばあったからだ。その子の家が、母方の祖父母の家に近いので、ランドセルを預けに立ち寄ると、来客が帰った後らしく、土産のどら焼きが一箱あった。祖父母は美咲に、それを持ち帰るよう

促した。美咲がパンを届ける先のその子にも、  
持つて行きたいと言うと、祖父は包を渡しな  
がら「どら焼きのことは言わずに渡せ」と言  
った。わけを尋ねると「思いやりは、人知れ  
ずする方がいい。自分も忘れるくらいが丁度  
いい」そう言って美咲の頭を撫でた。

祖父の言ったことの何たるかを、あの頃は  
分からなかったが、そんな三郎を父に持った  
喜代が、三郎の美学を受け継いだとしても尤  
もなことだろう。喜代が言う「あの人」がそ  
んな人で、そこに母が惹かれたのも、おかし  
くはないと美咲は思った。

気がつけば、喜代も美咲も、共に窓の外を  
見ていた。美咲が窓の向こうに祖父を見てい  
たように、喜代もあの人を見ていたのだろう。

美咲は窓の外を見たままで言った。

「それで、母さんとその人はどうなったの」

喜代も窓から目を離さず答えた。

「どうもならんよ」

「破局？」

「初めっから何もないのに、破局もないさ」  
「じゃあ、浮気も本気もないんじゃないの」  
「いいや：：あれは本気だった。いわゆる男  
女の関係は無かったけど、母さんの心はあ  
人にだけ向いていたもの。だから心で不倫を  
犯したと知っている。だけど、わたし自身は、  
悪いことだとは思っていないの」  
美咲は、母の大袈裟とも思える言葉の中  
も、祖父の面影を見た思いがした。  
「結局どうなったの」  
「足掛け三年この島にいて、自分の島に帰っ  
て行ったよ。オホーツク海の色は美しいけれ  
ど、南の島も美しいので、いつか見に見てく  
ださいってね。それが最後の、こゝと、ば」  
月は高く昇り、窓からはもう見えない。喜  
代の横顔には、語ることの無かった木箱の歴  
史を開放した満足感が溢れているようでもあ  
った。  
「あの人と初めて二人で過ごした日の夜は、  
レモン色の月が出ていたよ」

喜代にとってレモン色は、恋の色なのかもしれない。

二人の前で写真は、何か、いけない物のように、テーブルの上に裏返しで置かれている。それに目を落としながら、喜代はぼつりと言った。

「その写真は、通りすがりの人に撮ってもらったの」

\*

蒲団に入った美咲は、なかなか寝付けなかった。初めて母から聞いた話に、気持ちが悪く、何処から湧いてくるのだろうか。母に初めて女心を感じたからなのか、母の純粋さに触れたからか、それとも、好きでもない人と、人生を歩まなければならなかった母への憐れみなのだろうか。

思えば母の中に「古い」を意識したのは、美咲が三十歳くらいするときではなかったか。それは喜代が今の自分と同じ年頃のことだ。

それまで美咲は、テレビドラマを観て泣く以外、泣いた母の姿を見たことがなかった。そのせいなのか、あの頃、人は五十も過ぎれば、何もかもを知り尽くし、人生を達観できるのだろうと思っていた。もう、はしゃいだり、泣いたり、心ときめかせたりしない年頃なのだと思ひ込んでいた。そして、そのことを疑いもしなかった。

この夏自分は、あの頃の母と同じ年齢を迎えた。しかし、この歳になっても、はしゃぎたかったり、泣きたかったりするし、甘えなかったりも、褒められたかったりもするのだ。そして、そんな人間の心の機微に気づきもしないまま、この歳まで看護の仕事が続けてきたことや、喜代の、母以外の人格に触れて驚いた自分自身にも驚くのがあった。

今、美咲は、心という実在しない臓器を、自分の身体の奥深くに感じていた。それは余りにも曖昧な存在でありながら、確かなものだった。

島の夜は、もう煌めいてはいない。船の低いエンジンの音も聞こえない。けれど、美咲にとってこの小さい島は、古里以外の何ものでもないし、自分の歴史を内包する、大いなる島なのだ。

母と約束している春の旅行は、宮古島に決めた。母の言う「あの人」の島に行こう。珊瑚礁に囲まれた南の島に立ち、あの人の島の風を受ける母の姿を思い浮かべながら、美咲は、南の島でもレモン色の月が出るのだろうかと思った。

蒲団の中に自分の体温が満ち、美咲を包み始めた。風が出てきて窓が軋んだ。月は今夜も島を照らしている。

——春になったら、あの人の島に行こうね。

美咲は心の中で、何度もそう母に語りかけながら、ようやく小さな寝息を立て始めた。

了